

平成30年6月22日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780444

研究課題名(和文)人形遣いの稽古場面における身体的相互行為を起点とした「学び」の構築

研究課題名(英文) Learning through Corporeal Interactions in Training Session of Body-techniques in a Puppet Theater

研究代表者

奥井 遼 (Okui, Haruka)

京都大学・こころの未来研究センター・連携研究員

研究者番号：10636054

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「わざ」の稽古場面における、教え手と学び手との間の行為のやり取り(身体的相互行為)の観察・分析を通して、近代教育における知識伝達のあり方を根本的に見直すことを目指すものである。人形浄瑠璃を中心とした国内外のフィールド調査および理論的考察により、単著の刊行をはじめとして、新たに編著本、共著本、研究論文を発表し、その成果を学会のみならず広く一般社会に還元することができた。同時に、フランス・パリ第V大学を拠点として在外研究を行ったため、教育学のみならず、哲学、心理学、人類学など周辺領域の先端的研究者たちとの学的交流を重ねた。海外での学術調査も飛躍的に進展したことも特筆すべき成果である。

研究成果の概要(英文)：This project aims to reconstruct the learning theory about techniques of the body, by examining the gestural and conversational interactions (corporeal interactions) in training sessions between teachers and students. The fieldwork for the project was conducted at a Japanese puppet theater and a European contemporary performing arts school. This project resulted in three positive outcomes. First, I published an academic book, a few collaborative books, and scientific papers in journals; I also gave presentations based on the project at international research conferences. Second, the three-year post-doctoral research experience in France enriched the present scholar's networks beyond the field of education, in disciplines such as philosophy, anthropology, and sport sciences. Finally, the outstanding development of the fieldwork in national art schools in France will allow this project to progress toward a new theory of the transmission and creation of techniques of the body.

研究分野：教育学

キーワード：わざ 身体的相互行為 人形遣い

1. 研究開始当初の背景

近年、教育学において「身体で学ぶ知」への関心が高まっている。この研究の高まりは、「わざ言語」の発見による指導言語の解明(生田 1987, 2011)、知識の「身体化embodiment」(Johnson 2008)の解明などの卓越した成果を上げるに至った。学校教育に対して「知識偏重」の批判が長く突きつけられてきたことに鑑みるならば、身体で学ぶ知とその伝承・習熟の原理の究明は、記号的操作の学習作業を優位に置く今日の状況から脱却するための有効な手がかりとなる。

だがその追求は未だ、近代教育学を支えてきた「表象主義」からの脱却を遂げる段階には至っていない。「表象主義」とは、学ぶべき知識—たとえそれが「身体知」と呼ばれるような技能であったとしても—を、あらかじめ「表象化」して、個人から個人へと一方向的に伝えるかのように捉える学習観である。こうした見方のもとでは、教え手は機械的に伝えるだけの人、学び手は機械的に受けとるだけの人、という静態的な図式に陥り、関係そのものの変化や、当人の主体的な工夫を見落すことになる。「身体による学び」を原理的に解明する研究は、「頭で覚える」か「身体で覚える」という二元的区別を指摘するだけではなく、「表象主義」的な学習観を根本的に脱却する学習モデルの構築へと向かうべきである。

2. 研究の目的

「身体で学ぶ知」とその伝承・習熟の原理を究明するために、本研究は、わざを生業としている芸能者の実践を調査することを試みた。学術史を振り返れば、わざは、「身体技法」の概念によって、人類学(Mauss 1940)や社会学(Bourdieu 1960)の領域において探求されてきた。近年では、わざに関わる身振りやしぐさ、非言語的なコミュニケーションを分析するための、精緻で粘り強いフィールド調査の手法が洗練されている(福島ら 1995, 菅原 2002, 倉島 2005)。本研究では、これらの成果を取り入れ、教育学が対象としている学校教育の枠をあえて飛び出すことで、ユニークな教育学的研究が達成されると考えた。そこで、淡路人形座(兵庫県南あわじ市、1976年に重要無形民俗文化財認定)でフィールド調査をし、人形の操作技術や習得過程を明らかにするための参与観察を行った。その際、フランスの哲学者メルロ=ポンティが提唱した現象学的身体論・言語論を手がかりとし、人形遣いたちの稽古の経験を記述することを目指した。

3. 研究の方法

国内外の「わざ」の稽古場面を分析・考察するために、以下二つを研究方法に据えた(1)わざを生業としている芸能者の実践への調査、(2)フランス身体論を中心にした哲学的理論の参照である。

(1) わざについてのフィールド調査

平成 26 年度は淡路人形座へのフィールド調査を集中的に行った。対象とする稽古場面は、淡路人形座の公演事業、地元の中学校・高等学校における部活動「郷土部」である。前者においては、上級者が高度なわざを身につけていくプロセスを、後者においては、入門者がゼロからそのわざを習得していく過程を観察することができた。淡路島における事例は、伝統芸能の継承という、共同体の時間的・空間的文脈を背負った学びである。その背景からわざの習得を読み解くことによって、厚みのある学びモデルの構築が可能になった。

(2) フランス身体論の調査

身体的経験の記述を試みた先駆者として、フランスの哲学者メルロ=ポンティが挙げられる。西洋の哲学的伝統が、意識や理性といった抽象的認識作用を重視してきたのに対して、メルロ=ポンティは身体の働きに注目し、抽象的認識作用の始まりが、知覚および運動にあることを論証した(Merleau-Ponty 1945)。本研究では、そのメルロ=ポンティ哲学を発展的に応用し、その概念や思考方法を、身体的行為の構造および当人の意識作用を分析することを試みた。また、平成 27 年度より、日本学術振興会海外特別研究員の身分を兼任し、活動拠点をフランスに置いた。そこで、フランス身体論に関する最新の知見を調査し、本研究の理論的基盤を構築することを試みた。

4. 研究成果

本研究により得られた成果は、(1)わざの伝達構造の解明、(2)教育哲学におけるメルロ=ポンティの読み直しに集約される。また、国際シンポジウムを企画・開催することで、理論的な成果だけではなく、(3)国際的共同研究の遂行という成果に結実した。加えて、(4)今後の「わざ」研究の発展に寄与しうる新規フィールドの開拓も重要な成果である。

(1) わざの伝達構造の解明

人形遣いたちは、師匠から弟子へとわざを伝達する際に、言葉と身振りがワンセットになった相互的なやり取りを行う。発話や身振りを踏まえた身体的相互行為を詳細に分析することにより、従来「模倣」や「反復」として語られてきたわざの稽古が、双方向的な共同作業として成立していることが明らかになった。すなわち、教え手から学び手へと伝わる知識は、表象・概念として伝達されるよりも以前に、しぐさや身ぶりによって構築される行為空間において伝承される。その行為空間もまた、特定の空間的・時間的文脈に規定されており、たえず変化の中に置かれている。これまで見逃されてきた表象以前の領域に光を当て、学習場面の構造を立体的に

把握することで、知識の伝達は、共同的な働きかけ合いの中で遂行されるダイナミックな営みとして捉え直すことができた。これは、「表象主義」的な学習観の根本的な修正を可能にするような、新たな学びの原理になりうるといえる。

本成果は、単著『わざ を生きる身体——人形遣いと稽古の臨床教育学』(ミネルヴァ書房、2015年)の刊行はじめ、学術誌 *Phenomenology & Practice* への論文掲載等、複数の論文へと結実した。

(2)メルロ=ポンティの新たな位置づけ

メルロ=ポンティによれば、人は日常的なコミュニケーション場面において、双方向的で、未だ明確な意図を持たない、それでいて関係構造に大きく寄与する身体的行為の相互作用に身をさらしている(Merleau-Ponty 1945)。こうした間身体的な働きかけ合いこそ、教育の場面において、教え手と学び手との間のコミュニケーションを駆動する一つの原理であると見なすことができる。これまで教育学において身体に向けられた関心の多くは、身体を「教育の対象」と見なしてきたが(矢野 1995)、むしろ身体とは、教育的意図をすり抜けて、絶えず他者や環境と相互作用を繰り返す、教育的関係を下支えているのである。こうした観点は、暗黙的なわざの働きを明らかにするのみならず、教育学が前提としてきた学習のあり方に対する根本的な再考を可能にするだろう。

本成果は、国際会議 The International Network of Philosophers of Education 2016 での発表等に結実した。

(3)国際的共同研究

フランス在外研究により、パリ第V大学を中心として、「身体」に関心を寄せる哲学、社会学、心理学分野の研究者たちと交流を重ねることができた。また、パリ高等師範学校を中心としたセミナー・コロキウムへの参加を経て、現象学研究の拠点・フッサーアーカイブのメンバーとも知己を得た。哲学テキストの読解のみならず、具体的実践(精神分析、ハンディキャップ、アート、レジャー、新スポーツ等)にも着目しながら思索する研究者たちと今後も連携を重ねることで、本研究を飛躍的に発展させられることが期待される。

大きな成果として、国際的共同研究の一環で、パリ第V大学を拠点として、2016年6月27日~7月1日の日程で、身体哲学国際会議(International Conference of Body-week)に主催者として運営に加わった。これは、フランスを中心として、ブラジル、日本、UNESCO等から研究者を招聘し、身体哲学に関する国際的研究ネットワークの形成を図るものである。この中で、本研究では、日仏会議「生ける身体を経験(Living body's experience)」を主催し、身体哲学の領域にお

ける共同研究の下地を作ることができた。なお、本成果の一部は、現在編集中の共著(2018年出版予定)へと結実した。

これら学的ネットワークの芽生えは、本研究における学習理論の構築に寄与したのみならず、身体をめぐる現象学的・認知科学的・教育哲学的潮流の最先端に、本研究を位置づけた。国際交流がまだ多いとはいえない学会状況にあつて、これら研究者とのネットワークを発展させることは、将来の学的・人的交流に多大な貢献をすることになるだろう。

(4)新規フィールドの開拓

パリ第V大学との共同研究のなかで、フランス国立サーカス学校(Centre National des Arts du Cirque)をフィールドとして調査を開始することができた。継続的に調査を重ねることで、教師との濃密なコミュニケーション、守られ恵まれた環境、自発的な遊びなど、新たな芸術活動を支えうる教育システム、またそれを支える文化的背景が明らかになりつつある。スポーツでもレジャーでもない、「アート」としての活動は、今後、既存のスポーツ教育とも、わざの伝承とも異なる次元において、身体と教育、教育と文化の新しい関わり方を追求する可能性を開くだろう。

平成29年度には、フランス国立人形劇研究所(Institut International de la Marionnette)、および国立高等マリオネット学校(École Nationale Supérieure des Arts de la Marionnette)での調査を開始し、フランス芸術教育思想・実践の解明に着手することができた。近年、フランス人形劇は、伝統的なマリオネットのみならず、様々な形式の人形を開発することで、新しい芸術・教育の手段として注目を集めている。これまで本研究では、日本の人形浄瑠璃の「わざ」について分析してきたが、フランスの人形劇を新しいフィールドとすることで、人形に関わる身体技法について、より広い視野から捉え直す可能性が開かれた。

これらの成果は、国際会議 Journée d'études de CNAC、Journée d'études de Chair ICiMa での研究発表へと結実しつつある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

Haruka OKUI, "Transforming Body, Emerging Utterance: Technique Acquisition at a Puppet Theater", *Phenomenology & Practice*, 査読有, Vol. 11, No. 1, 2017, 18-31

奥井遼「学習しつつある身体を記述する

稽古の現象学試論」『身心変容技法研究』、査読無、6号、2017、98-105

奥井遼「身体的主体を経験する 『身体による学び』の現象学のための理論的整理」『いのちの未来』、査読無、2号、2017、1-17

<https://doi.org/10.14989/218235>

奥井遼「『ユトレヒト学派』の現象学的教育学再考」『学ぶと教えるの現象学研究』、査読無、17号、2017、74-84

Haruka OKUI & Bernard ANDRIEU, « Sentir son corps vivant : une method emersiologique », *Education Physique et Sport*, 査読有, No. 372, 2016, 18-21

奥井遼「知識の参照点としての身体 淡路人形座の稽古場面における『ままならなさ』の現象学的記述」『学ぶと教えるの現象学研究』、査読無、16号、41-54

〔学会発表〕(計10件)

Haruka OKUI, « Le moment où les élèves réussissent la figure : Une analyse des communications corporelles dans l'apprentissage des gestes », Journée d'études de CNAC, Université de Reims, April 2017

Haruka OKUI, « Apprentissage d'un nouveau mouvement par le biais d'interactions : La marionnette et le cirque », Journée d'études de Chair ICiMa, Centre National des Arts du Cirque, October 2016

Haruka OKUI, "What His Body Could Not Catch: A Pedagogical Description through/beyond the Phenomenology of Merleau-Ponty", International Network of Philosophers of Education 2016, Warsaw University, August 2016

Haruka OKUI, "Transforming Body, Emerging Utterance: A Phenomenological Description of an Interactive Training Session for a Puppet Performance", 35th International Human Science Research Conference, Ottawa University, July 2016

Haruka OKUI, "Toward An Embodied Philosophy: A Dialogue between French and Japanese Investigations on the Living Body", 2nd International Conference of Philosophy of the Body, Université Paris Descartes, June

2016

Haruka OKUI, "Academic Engagement and Encountering of the Different Knowledge in Awaji Puppet Theatre", IUAES Conference 2016, Dubrovnik, May 2016

Haruka OKUI, "Transforming the Body Schema in Awaji's Puppet Performance", International Conference of Body Ecology in Physical, Adapted and Sportive Practices (GDRI836 CNRS), Université Paris Descartes, May 2015

Haruka OKUI, "Investigation for Philosophy of the Body in Japan", 1st International Conference of Philosophy of the Body, Kyoto University, January 2015

Yin YIN, Alicia PERALTA, Haruka OKUI, Francisco VARGAS, "The World of Thinging Thing: Several Phenomenological Snapshots", 33th International Human Science Research Conference, St. Francis Xavier University, August 2014

Haruka OKUI, "Lived Experience of Master and Novice: A Phenomenological Description of a Training Session at the Awaji Puppet Theatre", 33th International Human Science Research Conference, St. Francis Xavier University, August 2014

〔図書〕(計7件)

Haruka OKUI, « Etude des interactions dans l'apprentissage des gestes : le cas du théâtre de marionnettes et des arts du cirque » Cyril THOMAS & Bernard ANDRIEU (eds.) *Entre les corps*, 2017, 123-140

奥井遼「身体変容と臨床教育学」矢野智司・西平直編『教職教養シリーズ第4巻 臨床教育学』協同出版、2017、87-112

Haruka OKUI « Comment le corps saisit-il un nouveau mouvement ? Vers une énième dimension d'une interaction des corps » Bernard ANDRIEU (ed.) *Apprendre de son corps*, Press universitaire de Rouen et du Havre, 2017, 89-102

奥井遼「わざの臨床教育学に向けて 『できる』と『できない』をつなぐ身体」鎌田東二編『講座スピリチュアル学 第5巻 スピリチュアリティと教育』、ピング・ネット・プレス、2015、203-229

奥井遼「生きられた経験(expéience vécue)
への道 湯浅泰雄とメルロ=ポンティ」黒
木幹夫・鎌田東二・鮎澤聡編『身体の知
湯浅哲学の継承と展開』、ピニング・ネ
ット・プレス、2015、114-132

Haruka OKUI « Les marionnettistes de
Ningyo Joruri : Vivre dans un autre »
Bernard ANDRIEU (ed.) *Vocabulaire
international de philosophie du sport*, Vol. 2,
L'Harmattan, 2015, 113-119

奥井遼『わざ を生きる身体 人形遣い
と稽古の臨床教育学』、ミネルヴァ書房、
2015、332

6 . 研究組織

(1)研究代表者

奥井 遼 (OKUI, Haruka)

京都大学こころの未来研究センター・連携
研究員

研究者番号 1 0 6 3 6 0 5 4